

DOOKS 「For my child」 レビュー

東京・渋谷のギャラリー「April Shop」にて、ブックレーベル DOOKS の展覧会「For my child」が開催された。本展覧会は、パブリック・ドメインなどの諸権利が消滅、または一部権利が譲渡されている画像を使用した、子どもに向けた豆本の展示である。豆本は、DOOKS のデザインによる 8 種類とギャラリーのオーナーであり作家でもある 渡邊 紘子との共作の書籍が展示された。

豆本に使用された画像は、いずれもパブリック・ドメインなどの画像である。パブリック・ドメインとは、著作権など知的創造物に関する知的財産権が消滅あるいは譲渡などがされている状態を指し示す。近年では、データベースの活用として、国内外の美術館などが所有している作品の画像をパブリック・ドメインとして公開している。

今回の DOOKS によるプロジェクトは、このような無料で公開された画像をベースとして展開されている。その中で、パブリック・ドメインとして無料で公開されている画像をもとに制作された書籍が展示作品としてだけでなく、書籍という商品としても認知され、物流が生じていることに大変興味を惹いた。もちろん、DOOKS で制作された書籍は表紙が付けられ、ノンブル、トリミングなどデザイン・編集が行われたものである。しかし、そこで使用されている画像は、世界中どこからでも無料で入手できるものである。現在、パブリック・ドメインに関する使用規約の幾つかに目をやっても、そのほとんどが印刷・出版に関する項目を持たない。つまり、無料で公開されている画像を印刷して、それが書籍として流通されるということが想定されていないのである。

このような画像に関する解釈の上で、私たちは豆本のどこに作品、あるいは商品として「価値」をみているのだろうか。展覧会にあたり DOOKS を運営する相島大地はステートメントで以下のように本企画の趣旨を述べている。

「本企画は、物が多く溢れる世の中で、多勢ではなく限られたひとりを対象とした本の有り様を提示してみたいという、新たな試みです。また、多くの良質なデータを活用し、セレクトすること自体にデザインの創造性を認めるようなきっかけになればと思っています。」

ここで相島がいう「セレクトすること自体にデザインの創造性を認める」というアプローチは、一般的なデザインという認識とは異なるだろう。それは一般にデザインとはアイキャッチを目的として、購買を促すことが求められる表現行為であるからだ。しかし、ステートメントにも書かれているように、今日のように物や情報が溢れている世の中においては、YouTube の切り抜き動画、再生リストのようにその取捨選択自体がある種の「価値」を帯び始めていることも確かなのだ。

書籍や映像などの情報に関するセレクトを行なう権利としては、「編集著作権¹」、「編集権²」というものがある。国内では、あまり見聞きすることが少ないこの権利は、ハリウッド映画において何よりも重要視される権利のひとつである。現在は、インディペンデント系の監督、製作総指揮というポジションの登場によって変化は生じているが、一般にハリウッド映画においては、プロデューサーが「編集権」を持つことが殆どである。そのため、映画の編集はプロデューサー立ち会いのもとエディターと行われる。DVDで稀に見ることがある「ディレクターズ・カット版」とは、様々な理由により監督にとって不本意なまま劇場公開が行われた作品を別バージョンとして発表しているものなのだ。

上記のような諸権利問題からみたときに、DOOKSのパブリック・ドメインを用いた書籍の提案は、映画においては一般的である「編集権」（書籍などの編集物においては「編集著作権」）という認識を書籍においても広めていきたいという取り組みにも思える。実際にDOOKSから出版されている書籍には、グラフィックとしては表面に出てこない構想としてのデザインがなされているものが多くある。そのようなアプローチもDOOKSの魅力のひとつと言えるだろう。

また近年、展覧会はコロナ禍での開催が強いられているため、様々な制約を設けることがある。そのような中であるからこそ、DMやインスタレーションビューといったこれまで広報、記録として見過ごされていた要素の「価値」が再認識されてきている。今回、展覧会のDMは、A4サイズというDMとしては大きなものに豆本が原寸で掲載されていた。そのため、実際に来場することが難しい方でも届いたDMで実物のスケールを知ることが出来るような工夫がなされていた。また、会場のカッティングシートの位置を子どものアイレベルとすることで、インスタレーションビューと実際の展示でのスケールの差が大きく感じられた。写真によるスケールの変換は、目新しいものではない。しかしながら、子どものスケールと大人のスケールの差異には、大人になってから小学校の教室に入ったときに覚えるような愛おしさがある。今回の展示は、豆本だけではなく、DMやインスタレーションビュー、会場設営などにも工夫を凝らすことで、書籍以外からも楽しむことの出来る展覧会であった。

DOOKSの取り組みは、目新しいものを作り出すことを目的としていない。DOOKSのアプローチは、情報化、オンライン化が加速度的に進む社会の中で、私たちが何気なく通り過ぎてしまう事柄に対して気付きを与えてくれるのだ。ブックデザインを中心としながら、展開されていくDOOKSの活動を今後も注視していきたい。

キュレーター 岡田 翔

¹ 素材の選択、配列などによって創作性を有する編集物を保護する権利。

² 劇場公開用に映画を編集する権利。または、最終的に映画を編集する権利。

岡田 翔（おかだ かける/キュレーター）

1989年栃木県生まれ。2012年立命館大学映像学部映像学科卒業。2015年東京芸術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。主なキュレーションに、遠藤祐輔・金川晋吾・金村修「imshow」（kanzan gallery、東京、2020）、キム・ハケン・佐久間啓/Rondade「imshow」（kanzan gallery、東京、2020）、金村修「Copyright Liberation Front」（The White、東京、2020）、篠田優「ひとりであるときのあなたをみてみたい」（Alt_Medium、東京、2021）など。また、展覧会企画・キュレーションと並行して出版レーベル paper company を立ち上げ、作品集や図録の制作、販売も行う。